

和漢文探玉已之七

○銘類

鑑塔銘

無序

蓮二房

佐山文庫



今歲享保丁酉秋八月十六日有當先師
亡名之七面忌則構一向四面之墓取而
祠堂曰文星觀居謚名曰梅花佛歷然則
此塔之厚鑑也圓直一尺二寸而面亦者
殿今之謚名背亦者合誌年與月矣其
地者合造立美濃國山縣郡之輪山之西

北[△]黃山禪刹之塔頭梅泉庵之西園止乎
山者從本備水竹之奇麗而先師一家之
菩提寺也抑謂文星意者出一行禪師之
一掌經而天文星者我師之主命也其頌
曰余遇天文秀氣清滯腹文章錦繡成云
然則我師之所遊文章天生文質而非吾
輩之可談實覺觸月花之折也則憂廢與
神助之操要耶祖翁嘗稱我師之文字而
以彼之文章換我之俳諧則我者可遊文
章彼者可狂俳諧與者人庶有年采之遊

品而文章者慰老之起卧俳諧者交人之
好惡則也抑社見雞波之遺快了則文章
及故者在武陵而乍預扶風之文庫可任
我師之點換與手誠思此等之遺命則今
惟讚文星之二字而可不題祠堂之面門
矣耶梅菴佛之三字者作師之標號不舉
在世之名數者所憚自稱之橫柄也乘斯
而鑑之為用也人之視之愛之人之視之
憎之憎愛者唯在人之奸醜而鑑者從本
無心也則爰建置一面之鑑塔而世々將

家我師之本情與也率哉錄先師之行狀
則入學者延寶之始也采其頌詠山寺之
紅葉連載入仔呂波之詞而為響音勃之
尺名者年漸十一之秋也來多義俳諧之
臘則在謂之十六年矣斯而不撓世上之
是非莫東華西華之名而東者無松鳩
之侍人麼西者踞筑紫之不知浦山而潛
身於憎愛之隅了則置心於虛實之歧矣
栗菖松草年有繕俳諧之皮毛居續五論
亦有調俳諧之姿情歷其外夜話云日記

云十論者增而白馬之眼藏而論俳諧
與誹諧之有差別古今事了則從矣儒仙
老莊之靡學者各詩歌連俳之同出習當
時粉成茄子瓠子之宗近而不令其齒着
其衣假令可及我行之荷擔人麼古老者
錫口新輩者歌耳而憎愛者例之無元時
鼻矣在在者不察建立之意地相手鑑之
羣坊而認虛認實則也爾有則從彼忘此
從此忘彼也則千歲之先者可拜彼人千
歲之後者可拜此塔矣夫

書ナリ始六余官圖ヲ出シ次三十二星頌アリテ文星
ハ才六ノ至命ナリ題ニ仙道天文曰星トアリ其頌曰
余遇天文秀氣清聰明智慧意惺々田也

秀身清古滿腹文章錦繡成
其謀星至命聰明佐利學識遇人作事和氣
若逢貴福藝相助者定為數魚頭獨白
虎榜登各金階玉階之人也若得權刃者
文武多才乃為上命若遇破厄孤驛及
重者乃多學少成不為書筆文墨之輩
乃下重遊湖海之人乃手藝術士之下命也
按スニ貴福以下孤驛ニテ九字ハ仙道天貴曰星ト云
道天馭星ト云ル十二星ノ各自ナリ去ル八年月日特シテ

掌中圖ヲ筆一画ニ成ハ天貴吉星ニ遇ヒ或ハ天馭凶星

ニ遇フ圖ヲ筆ニ師傳アリ細奉スニ暇アラス ●長恨歌

天生麗質難自棄 ●謝天運傳嘗於永嘉西

堂思詩竟曰不就為夢見惠連即得池唐春

草生大以存工常云此語有神助非吾語云

今論為輯抄難波ノ遺快七通アリ中ニ撰折一牧ハ遺物

覺書ナリ才五ノ書一文章あるなるをい枚向スル

文章のくも子福の支考するを撰換シ △文星觀之文字

ハ撰額ニテ燒桐ニ紺青ヲ入テ此品望鏡ノ公承字ナリ

筆者ハ加賀金城ニ用フル富田太椿ナリ本ヨリ歌子各高

シテ古筆新筆ニ委テ或ハ八分韻府ヲ著セリ
△楨必佛ハ子ハ草鮓ナリ和泉ノ青石ニ白河石ヲ以テ

臺トスニ重ニテ互尺餘アリ筆者ハ洛ノ井出一適ナリ
 此老ハ井出ノ家ノ嫡統ニテ越ノ福居ニ産シテ洛ノ涼風坊ニ
 住メリト卓犖不羈ノ凡人ナリトソ ●伊呂波ノ歌入ト獅子
 庵遺稿ノ夜話 我むし一はわりのほしきもむおぼ
 とつて一色とまふとちりちりおぼふとつて一に
 師坊やうし毛服山の雪もあまきと秋風と所より
 さりて我師父の古風とすおぼしかくさつてつて
 子孟母をなすいもけあふれはうのまきくをさす
 女もあまきとつてつてとつて一はわりのほしきもむおぼ
 遺訓ニ我滅後此年ニテ俳諧ノ上手モ出キ古又ナリ
 宣王ヲ其訓ノ評詞ナリ△滕王閣記ニ勃之尺微余トク
 書生云云之尺微余トク△重臣部北月ヲ云ヘリ
 △本朝文鑑

十名説 東ノあそふ時と東華坊といひあそふあそふ
 西華坊といふ華ノ子ハ宋也也トアリ其始ハ東華集
 ト云イ西花佳ホト云ル東西ニ佳ホノ名ニ據レリトソ △侍人モ
 子知モ古歌ノ歌入ナカラフ不知火トハ塊集ノ松詞ナリ
 △昔自松原ハ奥州行脚ノ俳諧ニテ△續五論ハ塊集行脚
 ノ遺訓ナリ續字ハ葛松原ニ續リトソ△東西夜話ト
 云イ自木日記ト云ル何レモ俳諧ノ附方ナリ △俳諧十論
 ハ芭蕉家ノ大綱ニシテ白馬ノ西字文ヲ奉タレハ佛家ノ
 正法眼蔵ト云イ涅槃妙心ト云キナリ△鑑五影坊ハ一篇
 ノ結語ナリ拵スニ十論以下ヨリ 認虚認實ニハ十論
 一部ノ註釈ナカラ儒仙詩歌ノ條衣冠ヲ断リテ影坊ノ
 二字ヲ以テ例ニ言語ヲ散シタル詠物諷諫ハ更ニ言ハス

微中解紛 絶妙ト称スレテ千歳ニ守ル太玄經ノ取意
銘解

△魚鳥ノ對ハ詩經ノ取意ニシテ魚ノ天遊ヲニシテ鳥ノ
魚ト鳥ト自他ニ成ル等ハ摘揀ノ筆力ニテ格ニ離轉
ノ絶妙ト稱スレシ或ハ扶林トハ夜間扶木鳥將隨ト云ル
例ニ古語ノ取意ナリ △文章錦繡ノ對ハ文章經ノ頌文
ナカラ難易ノ二字ノ働ヲ見ル △曾孔對ハ顛倒格ナリ
孔子ノ道ハ曾參ニ傳ヘ曾參ノ道ハ子思ニ傳フ假ハ子思
ノ名ナリ 拊スルニ此一對ハ祖翁ニ東華坊アト薄ニ此
子思ナシト銘者ノ辞美ヲ演ナカラニスヲ以テ四名ニ
對セル顛倒ノ例ノ常法ニシテ文ニ錯綜ノ絶妙ト稱スレシ
勸懲ノ對ハ字意ノ働ナカラ温厲ノ奇変ヲ尺ニセリト

○評云此終とふれ安録ト下評所の中ニ章とあり
りもこの評を名し評多し評すおれ何れもこれ
のくとして百世の名をいしむるもよむるもよむるも
い遺稿の秘記あり也評ノ命官の古文を評は
今階玉階の名をいしむるもよむるもよむるも
凶星ノ運々もよむるもよむるもよむるもよむるも
我師のよむるもよむるもよむるもよむるもよむるも
きくもよむるもよむるもよむるもよむるもよむるも

軌銘 並序

天章吹

世間ノ塵心のおとほひもむるもよむるもよむるもよむるも
視聽言

の二歳より三足の猿と稱し字一視る聴る
言さらぬありしにこれの中にもいさなりて禍
の所あれし魯北廟は北口とゆきまじし國の
そよむまじき言とほくまむの徳今これより
おほくおほくとも近くとも南に縣といふ地
地より居るすす秋の風を我家の年の歳
あつともやすひまじきと歳とさあし月と月を
みまじの歳よりいふ存る色を我よりをい
ぬむらぬまじきむらぬまじきといふ免言いふまじ
まじきとけりて老ぬらまじき例のむらまじき

後よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき
まじきとまじき言はしき他人のよりいふとまじき
まじきとまじき言はしき他人のよりいふとまじき
まじきとまじき言はしき他人のよりいふとまじき
まじきとまじき言はしき他人のよりいふとまじき

銘曰

瓢よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき
瓢よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき
瓢よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき
瓢よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき
瓢よりいふ言はしき他人のよりいふとまじき

一、空、之、も、認、され、鮫、と、ら、る、ゆ、り、虚、も、浮
 と、れ、虚、う、ら、と、し、日、十、時、の、用、あ、ら、さ、や
 孰、く、許、由、い、鳴、と、増、ち、し、空、也、と、る、と
 ち、も、し、れ、韓、愈、う、な、達、と、お、ら、れ、え
 ち、何、し、も、し、得、お、と、不、ま、あ、れ、さ、ま、ら、し、も
 秋、の、も、し、も、る、の、非、也、と、き、し、り、き、し、り
 又、石、の、大、い、あ、ん、し、み、し、り、の、お、さ、ん、に、り
 殿、へ、ま、つ、り、し、子、能、潜、の、所、説、と、ま、さ、れ、也

○註、曰、視、聽、言、動、四、歳、八、則、出、タ、リ、△、宗、詔、觀、周、
 入、太、祖、后、穆、之、廟、有、金、人、秉、斧、鉞、其、口、銘、曰、此、之

慎、言、人、也、中、畧、口、是、禱、之、行、也、△、角、口、聃、へ、前、出、い、り
 △、論、語、異、端、註、當、如、滄、声、夏、色、以、上、遠、之、云、巧、言、ノ、二
 字、モ、論、語、ノ、詞、ナ、リ、△、銘、解、△、論、語、吾、豈、匏、也、哉、
 乎、能、繫、而、不、食、云、△、許、由、カ、瓢、ハ、隱、逸、傳、ニ、ア、リ、細、舉、
 二、及、ハ、△、空、也、ノ、鉢、扣、ハ、高、僧、傳、ニ、在、リ、細、舉、ニ、及、ハ、ス、△、韓、文、
 送、孟、東、野、序、大、凡、物、不、得、其、平、則、鳴、以、鳥、鳴、春、以、雷、
 鳴、及、以、虫、鳴、秋、以、柝、ス、ル、此、一、段、ハ、鳴、ノ、字、ニ、言、語、ヲ、形、容、セ、シ、カ
 韓、子、ノ、神、鳴、ハ、憎、愛、ノ、結、ニ、テ、此、等、ヲ、文、中、ノ、文、ナ、リ、ウ、漢、ニ、ハ
 筆、端、鼓、舞、ト、云、ク、倭、ハ、筆、白、ノ、絶、妙、ト、稱、ス、△、在、子、魏、王
 貽、我、大、瓠、之、種、我、樹、之、成、而、實、五、石、云、△、降、詔、指、及、以、り
 厨、へ、ま、つ、り、と、そ、と、と、識、仔、達、ち、り、字、者、の、池、抄、に、ま、つ、り、根、也
 ○、傳、云、は、銘、と、克、己、の、こ、も、と、ま、さ、れ、一、篇、の、稱、と、り、あ、ら

猿之祝釀言のこと起て新言のこ子と猿のこ
海之をたの味と云ふ一作者と越の福并に
て能治一海の者ありて天并に有る高
と標とて昨日襄伯免の忘年のありと也

俎板銘

岸昨襄

日新之日左
以立象一十年住
之日節獻鶴
惠王何遠厨
子攘軍隱父

翔云々晦云々
横導四時曠
七種粥唯芹
孔子未学軍
臣亨兒郷良君

柳鱧身款滑

解鱧豎為斷

籛矛頻令郷音

納豆坐所聞

天牟畏河豚

我生宜海雲

争忘甚弱鏜

縦嗅雌雄董

寧識無絃趣

竹見而且有文

註曰書經湯之盤銘曰日新日新日新按之此後語俎板
ノ日用ニ藝暗アルヲ云ントテ新古ノ子ニカヲ添テリ論語ニ
吉相録羊八俎板銘ノ寄セニテ爰ニ晦朔ノ佳節ヨリ年月時
ノ日用ヲ見ルニ之日節ニ鶴ノ意下ノ古ハ奉膳式ノ沙汰
ニヤ尋又ニ七種式八奉ルニ及ス孟子惠王章ニ有
肥肉之宜王章君子遠厨云按之此句ハ荘子ニモ

梁惠王ハ危^クノ所^ニ在^リア^リハ宣王ノ如ク危^ク厨^ハ遠^クスト同書
 ニ同語ヲ翻轉セシ^ル也等^ヲ奪^フ胎^ノ絶妙ト稱ス^レシ^レ論語
 趙豆之^レ言^ハ則^チ嘗^テ聞^ク之^キ矣^キ軍旅^之言^ハ又^ハ未^ダ之^レ學^セ也
 ▲論語父攘^フ羊^ヲ而^テ子證^ス之^キ子曰^ク父^ハ爲^ス子^ハ隱^シ子^ハ爲^ス父^ハ隱^ス直^キ在^リ其^中矣^キ▲史記桓公曰^ク易牙^ハ亨^テ我^レ子^ヲ以^テ快^ス寡^人一^ラ尚^キ可^キ疑^フ邪^ト按^スル^ニ此^レ對^ハ羊^ニ趙豆^ノ孝^行シ^テ合^シ兒^ハ鄉^食應^ノ忠^節ヲ^顯ハ^ス君^臣父^子ノ^字對^ハ更^ニシ^テ又^ハ三^ニ意^對ノ^絶妙^ト稱^スレ^シ ▲論語畏^テ天^命畏^テ大^人云^ハ按^スル^ニ此^レ對^ハ公^私ニ^用ラ^ル云^ハカ^ラ何^豚ト^云イ^海雲^ト云^ハル^物名^ノ備^ヲ見^ルレ^シ ▲白馬談笑訓^色と好^ムと^温饒^ノこ^とく^とま^と一^とる^妻切^ノこ^とく^とま^と一^とと^豆府^名ハ^和平^ノが^あり^て其^中弱^クハ^此儀^ノと^いふ^あり^と也

△論語山梁雌雉時哉^{子路共之}之^レ嗅^テ而^テ作^ッ擗^スニ^此一^對ハ^雌雉^ト一^雉子^ノ雌^ト字^ヲ云^ハ下^葛弱^ノ連^綿ニ^對セ^ント^テ論語ニ^嗅字^ヲ假^テカ^ラ雌^雉ト^名ニ^訓シ^タル^也此^等ヲ^擗語^ノ絶^妙ト^稱ス^レ ▲例明本傳^常擗^無絲^絲今^日但^識琴^中趣^何ガ^セシ^上声^ニ云^ハ論語質^勝文^則野^文勝^質則^史文^質極^ニ而^然後^君子^也○^厚云^此落^と亡^句十^韻一^文欣^顔の^セと^とと^て子^ハ私^ノ豹^礎と^のら^ひと^を會^フ後^文て^と會^フ後^信信^ちら^んこ^れと^を信^テし^能信^の平^信ち^らと^ある^一を^也は^らて^一を^仰の^信と^り不^レレ^也法^と姐^板の^容と^とを^レ常^ノ魚^とを^レ此^等と^求む^{より}信^中首^弱の^とい^とを^所と^り以^テ新^ノ教^と

これやとて譯し文所々概としてあるは其の
實とたゞあひあひと能くの塵々あるは其を
我々の文者としてつとむる也

本箱銘 並序 菅師冬

久々此天地と文庫と一の中に得たるは
かくれし物とつとむるは其の心
ありしとて一歸するは其の心
思ふとて一歸するは其の心
ありしとて一歸するは其の心

丁千校の箱の押書とあるは其の心
おもしろき事楳の字名とて其の心
おとす事其の心とて其の心
るやとて其の心とて其の心
鼠と其の心とて其の心
わつとて其の心とて其の心
其の心とて其の心とて其の心
其の心とて其の心とて其の心
其の心とて其の心とて其の心
其の心とて其の心とて其の心
其の心とて其の心とて其の心

あけぬるあまともく

其銘

智を志とほり彦の如く
 假ふとあふと花の如く
 松のまろり流をきつりや
 桐の節あき歌をやくく
 机の飾の目とほりまことと
 朝の花のいろははらつる
 雪般をも花枝にけき
 竹の節あき遊をむ
 花けらぬとさかむり代と
 むしはらぬとさかむり代

○註曰△平文子万事帰一云碧岩録万法帰一云△雪雪
 故夏ハ前ニ出タリ △達上ノ六門集ニ以心傳心不立文字

▲晋書 郝隆七月七日仰屋曰曝服中書云

其銘 ▲在子カ蝶々夏三前ニ出タリ ▲野語述説 勸学院 雀
 ハ考ホ求ラ嚙トハ野語ノ説アリ 或云雀即僕隸名也トモ
 或云学院園中ニ有黄鳥鳴ニ呂巖非熊四字トアリ

△淮南子 魯般仕楚王作雲梯攻宋云 ▲竹田ハ後朝ノ
 細工人ニテ多ニ和漢ヲ對セシ厚ナリ △後語拾遺ニむし
 の刺今此葉印と盛衰の变化といをその血と云

○浮云は後と隠見の子にありて 虚もあて実と初ま
 ったりむし泡もあて予に儒師を此和漢の書籍を貫い
 ぬりたり博考の各とあてられむとあてられ達上と郝隆
 といふとこのむしの程よりて用括とけらるゝとさる
 へまも況や短と刺との踏線を削入笑中の刀といふ

教ふあざり予を行はの罾打とらりて
かりく社右とおあさるやふ不弁法炮の
とと罾打とらりてや罾打とらりて
とれらも柄とらりて

殺りあれ敵とぬさる

打りあれ罾とらる

胡馬不にちりやと

與叔克己の路あり

○註曰はれく竹五とされはちの裏とこれ
攤くむとらる罾とらる罾對に鉄炮ヲ見ハト云キ

身ト會身トノ字ヲ對ノ倒將ノ絶妙ト稱スレ▲天守長城
ノ防キ史記ニ出タリ△一炬火河房宮燬ニ在リ炬字
ヲ炬トハ和訓ノ習俗ナリ△論語ニ釣而不綱也射而不
中庸慎其独也△憎罾罾ハ欽陽公ノ作ナリ爰ニ
ハ殿ノ一字ヲ稱スレ△京銘ニ其征也還仲社席之
上ニ云△與叔克己銘ニ殿有生均氣同縣胡馬
不に云

○序云此銘と履安の音用して欽陽と不にの二
字とあつて殿の一字より源語と一徳美のさる地と
燈破まゝと一とらる罾と叔克己銘と敵味方の用
ありて此銘の此文とある格ハ陋室銘とあり作者と
尾城の史官よりして大崎氏の逸士ありと云

○註曰▲竹取の羽の首又の万葉ニ長歌アリ奉ルニ及之はれく
るよ、好歌のつらありしくそれをいふあり △撰集本

りきまらりゆうも坊すんれさう、世生をト云ニ其詞

ヲ互照シテ次ニ西行ヲ出スキ断續ノ多クナリ△富はん西行

ノ益國ハ益師ノ家ノ形容ナリ△東坡カ戴マニ乗馱ト云

ル雪中國ハ和漢ニ多シ○たごニ文律中ノ事ハ前ニ出リ

●詩仙叢話ニ云、重、吳天雪履、香、楚地花 ○余能

各復句、世ノあるもさるに世あるのやとら哉

○原云け路を後集よとてうかしのきらみち

さりとえ禄甲戌のえ伊笑の西林藤庵よゆりて

又稿十二の編の再按あることけ路も其の二の編を

これに送稿の夜話よとて今や故の送文とて

傍向の藤林と論よきも凡國の派船集の

ハ藤林舎よきとらう人信と一にしうはさる

言と古文のきりひあはきと自字の遺文

ありとも我と神よむむお時、信路の指子のたふ

もあゆらん威後の選論といふよとまう一の我

けりまのうらよおあふの視るの在るあきくあり

何れよりまのたけりよのあふまたとくもて様

えせふのねまありたれしとまのりしあはははね

本曾き此飛見こけり湖東の玉耶觀よはくこれ

差塚の名よはてれり洛のあまきとす信れり差あり

或は武江の春向塚よ今此春の此經冊とたいりある

羽の香も一信するは嵐七の掛物との言もこの言を
と加しられおの代りあれはこれの選論の用と
あらはせ

野原鏡銘

而何仰

原夫世界之始者無鍛冶鑄物師之業蓋為
了共天圓地方也了万物各莫不具質含
德事自矣中亦麼謂鏡物者傳儒佛神之
魂而遠照國家之政兮近顯君父之道兮
况向明暮之鏡而男者持髮之不暴心則
女麼嗜同許之有塩敷様而霖苑起死松

之二葉成月出度御代之媒了矣斯者和
五倫之中了則實麼謂鏡之天下一者矣
抑從正月之重鏡五九添月日之光了則
不失四季折々之等花尔者水之成鏡了
身尔者翟之采歌了孰若不為風雅之便
飲者但爾儒行之孔夫子者七十而從心
所教其建置明德之鏡而若繁之伴達者
不為麼樂而不淫了哀而不傷了程子麼
所謂虚矣不時則可謂孔子無能諸之虚
實矣耶初又佛尔之教世高懸置淨玻

瑤之鏡而令眼_ア地獄極_レ衆_ヲ了_レ則八万_ノ大衆_モ
磨_レ五_ノ百_ノ羅漢_モ磨_レ入_レ一寸_ノ四方_ノ之箱_ニ被_レ照_ル
智慧_ノ之鏡_ニ而唯_ニ心淨_ク土_ヲ了_レ已_レ心_ヲ淨_ク陀_ヲ了_レ去_ル
此_ヲ不_レ遠_ク與_テ所_レ矧_ク夫_ノ神_ノ國_ノ之_ニ天_ノ照_ル皇_者生_レ給_ハ
白_ク銅_ノ之_ニ鏡_ニ則_レ被_レ爲_テ法_ノ岩_ノ戸_ノ之_ニ神_ノ樂_ニ而_レ後_レ給_ハ
手_ノ八_ノ咫_ノ之_ニ鏡_ニ居_ハ矣_カ在_ハ有_ル者_ハ万_ノ之_ニ神_ノ遊_ニ連_テ有_ル
面_ニ而_レ佛_ノ優_ノ之_ニ歌_ヲ給_ハ則_レ歌_ハ人_ノ連_テ奇_ノ之_ニ家_ノ者_ハ不_レ
知_レ佛_ノ諸_ノ亦_ハ者_ハ供_テ神_ノ爾_而不_レ崇_ム鏡_ノ之_ニ御_ノ數_ヲ果_ク
耶_ハ在_ハ有_ル入_レ道_者懷_テ入_レ一寸_ノ之_ニ鬚_ノ鏡_ニ而_レ容_ハ
者_ハ所_レ見_ル其_ノ鏡_ヲ了_レ年_者所_レ美_ハ此_ヲ指_テ了_レ額_ノ觀_ル之_ニ

漣_ハ波_也。鏡_ノ之_ニ山_ノ磨_レ近_ク了_レ則_レ耻_ラ老_ノ曹_ノ森_ノ之_ニ
名_ニ而_レ臨_レ海_ニ而_レ鬚_ノ磨_レ不_レ接_テ增_テ而_レ可_レ眼_ル儒_ノ仁_ノ之_ニ
眞_ノ義_ヲ探_レ神_ノ道_ノ之_ニ秘_ノ密_ヲ耶_ハ蜜_ノ文_ヲ了_レ雪_ノ且_レ了_レ仰_ル
花_ノ味_ヲ月_ノ而_レ及_テ鼻_ノ毛_ノ之_ニ用_ル心_ヲ而_レ已_レ也

○註曰_ニ老子_ノ經_ニ天_ノ地_ノ之_ニ間_ニ其_ノ猶_ハ橐_ノ籥_ノ乎_ハ虚_ニ而_レ不_レ屈_レ動_ス
而_レ愈_ニ出_ル云_ニ橐_ノ籥_ノ八_ノ吹_ノ革_ノナリ_云天_ノ地_ノ方_ノ圓_ハ前_ニ出_ル
△天_ノ下_ノ一_ノ作_テ上_ノ鏡_ノ裏_ノ銘_ニ了_レ了_レ其_ノ銘_ノ古_ノ凡_ノ稱_ス又_ニ君_ノ父_ノ
以下_ノ之_ニ事_ハ三_ノ五_ノ倫_ノ裁_テ断_テ了_レ見_ルキナリ_云○在_ハと_ニ集_テ奇_ト
而_レ了_レ了_レの_ノ後_ニと_レる_ノ水_ヲと_レち_テか_レら_レと_レや_レら_レり_ト云_レん_云
擲_ス之_ニ五_ノ字_ハ天_ノ和_ニ毛_ノ直_ニ名_ノ用_{アリ}ト_云之_ニ彼_ノ名_ハ水_ノ之_ニ鏡_ニ
了_レ續_ク故_ニ水_ノ之_ニ鏡_ニ了_レ了_レ花_ノ之_ニ鏡_ニ非_ス入_レ直_ニ名_ハ三_ノ成_ノ字_ヲ

以テ水ト鏡ヲ隔ル故ニ水ヲ以テ花之鏡ト成セリ去ハ其各ノ
 伊勢物語ニ人ヲ被知ノ歌ノ年亦彼テ不不ト單爲
 ノ差別アリ但シ爲ト矣トハ文和詞ニ動アリ山尊ノ我影ヲ
 見テ其鏡ニ舞フ夏ハ海と云る子ト出タリ細奉ニ用
 ナレ年竟ハ花鳥ニ寄セテ鏡ノ凡雅ヲ云ナリ△論語七十
 而從心所欲不踰矩△大學之道在明明徳云△論語
 緇童紅紫不以爲褻服註紅紫近於婦人女子之
 服也△論語罔睢樂而不淫哀而不傷云詩經罔睢
 ハ夫婦ノ中好ま喻トク△大學明徳註程子曰虛矣不昧
 以見象理而應乃直者也按スニ世結語ハ程子実字
 ラ語シトテ強テ我亦水ノ虚字ヲ舉テ明徳ノ字ヲ證又
 ト成セル例ニ離語ノ意地ト知ヘシ △淨玻璃鏡ハ佛經ニ

出テニ世通達ノ喻ナリト云按スニ世起語ハ眼傍ノ面影
 ヲリノ相ノ字ヲ形容セシマ法ニ隱見ノ絶妙ト稱スニ
 △寸四カト心ソカナリ唯心モ已心モ用ト知レ按スニ世ニ
 句ニ大和ノ直名各又ニ句讀ノ設アリ是ヲ漢文ノ字配リニ
 云ハ被照ノ二字ヲ以テ爲入ノ上ニ置テテ和訓ハ語路ノ
 畫アリテ上讀ハ十字ト成リ下句ハ五字ト成ル故ニ上ヲ八
 字ト成シ下ヲ七字ト成シテ句讀ノ長短ヲ配ナリ世等ハ
 大和ノ新制表ニテ例ニ倭文ノ周曲ハ返ルナキ故ニ和漢ニ
 音訓ノ差別アリト云前撰ノ百花賦ニ木瓜花ニ配アリ
 比丘尼ノ句讀ニ互見スニレ△唯心モ已心モ降土經ノ語ナリ前
 アリ△去心不遠モ前ニ山タリ △日本紀乃以老ヲ持
 白銅鏡則有化出之神是謂大日靈尊云大日靈ハ

○傳類

竹夫人傳

良壺峰

むしぬは琵琶湖の浮島より、あまのあまのひらから、あまのあまの
 津帳のうらなひを、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 回車の原より、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 崎の石より、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 美の山より、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 中へ、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 をつと、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの

ふあひ鏡の言はく、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 にあつと、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 ぬはるの、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 の、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 くらひ、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 ちと、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 かり、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 へり、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 とも、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの
 とも、あまのあまのひらから、あまのあまのひらから、あまのあまの

瓦器傳

河何毫

此も瓦器といふ物と混る純一の物なりて
 その容やうくその性ありきれと天帝此も以
 して非祇教教悉す常め其まじらふ物と
 ふりきりせれ人の代此酒なと多し暖熾
 傳平のまといひ何部常滑のまといひ
 といはれ格ともていつれは年族ありま
 ちやまると我々の重寶記ふ土器とかりけ
 訓きしるんと陶物の地名なりといれ和訓を

瓦器ハハラケの二字を用いて喜訓の通語なる一と云子保
 年中いけ傳をわくからぬ津や岩戸の津衛
 い二瓶のひくると後よりついで傳所の
 ありまんと和光のれもいふ所もむ況や教教の
 ちしちしと燃灯師のほりてし負すれ一灯と
 かきしり十二灯といひ万灯といふつれけ物
 ちくしてありちむしりて物告の蓬業よへぬ
 の舞やると初いよちむむ入の眩る
 力とかさりていかなる業花とほりま
 一燈のほりまぬれり年力とらま

○ほふは傳を實記して論議し自立の二字とりて物
の一事と訓練をとりてふたの筆然の音語より心
此名よりひくをきくは例のたうく例のさひくこれに
業人と笑殺とといふ一けりも業井にうて所名
と振うといふも君の役後よ存りて濃の岩崎
と隠遁をとりてを

讀隱逸傳

佐其玉

い—^{クニス}物本柄の奥此奥にもおまのいほと
はまう新炊し[△]脛とさけり人とはまこれほと
まうと大きらりあやまりせまうてかゝの世此人

んを素淡の比より有あれ九尺二寸と七き伽羅と
はより[△]孫のいひに—く耕とてさうと—と[△]ひま
合系れ—[△]此をらに婦まひさうの蛇と打神の
一念を起のま[△]ほをた—あれり—と[△]講—世と[△]程—り
隠遁を—と[△]何を世—[△]持—れ—り天竺路[△]人
[△]屋の桐子のま[△]り—[△]い—やあり[△]頼—く—と[△]市[△]中
—と[△]風と[△]す—[△]言[△]供[△]ら[△]月[△]の[△]妻[△]あ[△]子[△]と[△]—[△]あ[△]月[△]空
の[△]中[△]あ[△]金[△]此[△]な[△]達[△]と[△]よ[△]ね[△]あ[△]り[△]—[△]虚[△]中[△]に[△]—[△]踏[△]い[△]あ[△]り
あ[△]り[△]—[△]松[△]花[△]を[△]此[△]ま[△]ん[△]と[△]き[△]せ[△]り[△]—[△]か[△]ん[△]じ[△]ん[△]ま[△]の[△]ら[△]う[△]
の[△]ま[△]し[△]あ[△]れ[△]ん[△]秋[△]の[△]か[△]つ[△]の[△]ま[△]り[△]あ[△]り[△]—[△]と[△]れ[△]と[△]能[△]潜

の隠者も或は素人にもふくまはれんとす
その榮耀と非くある所を唯心の隠者なり
かくれあるは己心の空寂なりとありて和漢
人のききあはるる隠逸傳とありて全書也

○註曰△隠れく竹 栗栖野とふとてありてありて
入るより作しある初め栗栖野と折ちりてありて
とほむくあれんちりて△曲肱の論語より雜飲の其
段ノ取意ナリ △庭相子の栗栖野ノ結文ナリて其
いものきり人としていへばやまを相子と云え其歌
ノ歌入ナリ △俳語拾芥むより我の素人の事也
あはれは隠者の事也とて詞の隠者の事也

とありてありて一行おるりて△松花を素人繪二
して多ハ片成ノ墨は繪ナリ○古今集秋のきりて
のち書やとちりひりてとてちりてはりて△各書
榮耀ハ虚生カ故又ナリ前二山ナリ△唯心己ハ觀經ノ
詞ナリ前二山ナリ

○評云け隠れはれく竹のあはれゆとのほはよとて
和漢の隠者のあはれとて一儒仰めよとて此
其勝とてありてとてとてとてとてとてとてとて
其挫の事也格とてけりて也也とて讀孟嘗君傳
とて古文の例とありてとてとてとてとてとてとて
てとての廣くしてとてとてとてとてとてとてとて
ありてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

いづれをいふ原甲とはなれぬ名のおつとくは
常袋の込中となくはる由ありて殊の言
とくありあつとむらまはらり掲ふありある言
の根とつたれ果と何なるの事とて冷場醫者
とむらられく某後の中れとて同いん。神と
一類とある中に行ふ事とていふとく。とて
今とていふとく。とていふとていふとていふ
し。秋のゆゑをいふとていふとていふとて
あるとていふとていふとていふとていふ
とていふとていふとていふとていふとて

際のは所とていふとていふとていふとて
はとていふとていふとていふとていふと
の言ゆとていふとていふとていふとて
とていふとていふとていふとていふと
拂ふとていふとていふとていふとてい
くるゆとていふとていふとていふとて
い。我もかていふとていふとていふと
つ。に。海。命。の。あ。や。ま。り。と。又。晴。あ。つ。た。い。は。し。も
あ。い。と。い。は。し。は。め。つ。浮。世。の。舞。を。い。は。し。た。ま。は。し。つ。つ
廿四の各とていふとていふとていふと

天保十一年
 正月 朔日 卯時 卯
 二月 朔日 辰時 辰
 三月 朔日 巳時 巳
 四月 朔日 午時 午
 五月 朔日 未時 未
 六月 朔日 申時 申
 七月 朔日 酉時 酉
 八月 朔日 戌時 戌
 九月 朔日 亥時 亥
 十月 朔日 子時 子
 十一月 朔日 丑時 丑
 十二月 朔日 寅時 寅

天保十一年
 正月 朔日 卯時 卯
 二月 朔日 辰時 辰
 三月 朔日 巳時 巳
 四月 朔日 午時 午
 五月 朔日 未時 未
 六月 朔日 申時 申
 七月 朔日 酉時 酉
 八月 朔日 戌時 戌
 九月 朔日 亥時 亥
 十月 朔日 子時 子
 十一月 朔日 丑時 丑
 十二月 朔日 寅時 寅

ことよていそぬのくうをばしり流るはたれ
 ことばねさぬしゆあてはれはとましくと流
 斯文とちるちるしくしくに越めん此あけま
 さしや十るあむいしくかのるし流の表は
 てかりち此の流とましく流るしく流るるの流
 空とかういかにして流の流あけましくあ
 きらねたさち此の流とましく流るしく流る
 とちりいねらちるちる流るしく流るる
 あやましくいかにしくいかに流るる流るる
 流るる。

世ふかう—あながくさうしは—ありは流るる
 の三流とちるくは—ぬのれれしく流るる
 ちるちるあむいしくいしく流るる
 していしく流るるしく流るる。

而しての—年への流とちるちるは—ちるちる
 けるしかりちるちるちるちるちるちるちる
 ちるちるあむいしくいしく流るる
 月をちるいしくいしく流るる
 之流とちるちるちるちるちるちるちる
 ちるちる—あむいしく流るるちるちるちる

この文、新撰のたふし、虚言を削めたるものにて、
之の去年の秋ちも、るる草のふれ、虚言のちも、
又、實をけし、たふし、と、けし、實を、
と、けし、たふし、の、文、籍、の、類、の、
て、す、ち、た、ふ、し、と、た、ふ、し、
か、し、た、ふ、し、に、か、し、た、ふ、し、
よ、あ、り、て、耶、那、あ、り、と、ま、
よ、あ、り、た、ふ、し、の、
と、今、の、文、據、を、再、撰、し、て、
あ、り、て、た、ふ、し、と、た、ふ、し、
の、各、と、た、ふ、し、の、
の、各、と、り、た、ふ、し、

新撰を、あ、く、の、と、
右、切、ち、り、世、に、と、
一、部、の、

雲鈴法師行状記

蓮二房

も、傳、く、し、
本、店、家、の、侍、
始、と、武、陵、
又、を、井、の、社、
は、と、よ、く、
了、し、年、こ、う、

一也。こゝにのくをきふれあひあはれはたむの
 人よとらねくも詞のまらひあひ。裏の筋のむ
 不あくも心よあはれちりら。桶の筋のむ
 あらとあひあひ人の本直あねら。情のむ
 の情あひあひあひはてえ。祿の中はあひ。情のむ
 一也。こゝにのくをきふれあひあはれはたむの
 人よとらねくも詞のまらひあひ。裏の筋のむ
 不あくも心よあはれちりら。桶の筋のむ
 あらとあひあひ人の本直あねら。情のむ
 の情あひあひあひはてえ。祿の中はあひ。情のむ

神のえくひあひ。こゝにのくをきふれあひあはれはたむの
 一也。こゝにのくをきふれあひあはれはたむの
 人よとらねくも詞のまらひあひ。裏の筋のむ
 不あくも心よあはれちりら。桶の筋のむ
 あらとあひあひ人の本直あねら。情のむ
 の情あひあひあひはてえ。祿の中はあひ。情のむ

息のききあむねとともかくもはういぬれんといふ
へきつり二つごのあまうらみ様のそと一辞世あり

せがりりとあのをせし二月二日と
はたて一たの人くんとあうらあわの碑るいおはせ
のらおせまのこあまうらあはたあはらうら
と奥まのあまうらあまうら午の時
と自心をて碑る色あびまもた打ふらりて眠
れるうこくうあまうらあまうら此書化和尚
終果のうらまげんりや書中一箇の書やま
うらまげんりや書中一箇の書やま

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
奇特あんとてや書中一箇の書やま
洛の渡吾仲の墓誌文と後と

○註曰雷程子武其角カ標号たり感ハ雷子に云り△五老
并ハ湖東ノ少野ノ宿ニ在リ第阿佛ノ山在ナリ梅ノ社
トハ戸山ノ白蓮社ノ詞ニ次ニ倒明ヲ出スキヲ△倒明傳
ヲ為シ鼓吹ヲ為シ五ノ末、不屈腰解印後而故郷
云●飲中八仙詩、臣是酒中仙、其註此天上謫仙人也
云り謫トハ流罪ノ事ナリ △史記、賢士之處、世辭言者、錐
在、在、中、其先立見、梅、ニ世對ハ在、錐、後、語、ヲ和、ケ、テ
梅、ノ傳、語、ヲ對、セル、事、ト、云、イ、浮、ト、云、イ、包、ト、云、イ、由、ト、云、イ、
字對、意對、ハ更、ニ言、ハ、錐、ト、對、ト、自、他、ヲ對、セル、格、ニ、轉、對、

金口木舌の雲鈴之鑿三木欵ノ款又ラ假テ天下ニ能道ヲ體
 行ク徇人の喻ナリ迅雷下法師後錄ナリ云々鈴ノ御音
 ○漢云けいんを率此定録ナリは神の護持と云ふるや
 子に丹書の妙ありし結と一かや桐子なる遺行と
 なるにありし時を悉く他行ナリし我宗にも人好此
 宗近ありて西ノ事ノ夷百人と扣帳ニするも一知ら
 ずあまの御事と云ふり中國中國も之越路の果も故存
 の御借と云ふあるまじきと天下にひろくおきたる
 なるを云ふるを我と云ふ我と云ふるを故の
 行人ありし御行人と云ふ一人もあはれし御行人と云
 ふるを敬叔と車此轍と云ふは行人の轍と云
 へく越前ノ依を云ふ御行人と云ふは御行人と云ふ

そと行人の終るいふ命と云ふると本朝又選一重に鈴
 は神ノ列傳とあげて東蒼行人と云ふるは依中の
 念敷し兼里と云ふ男ありし御行人の兼里と云ふ
 し西蒼行人と云ふる御行人の御行人の御行人
 とも兼里と云ふ御行人の御行人の御行人
 之も此徒あるも命を同袍の御行人と云ふと今や
 蓮二と云ふ御行人の御行人の御行人の御行人
 と云ふもこれ顔回と云ふ御行人の御行人の御行人
 説經の内意と云ふ御行人の御行人の御行人の御行人
 とも云ふは御行人の御行人の御行人の御行人
 終ありし御行人の御行人の御行人の御行人の御行人
 の御行人の御行人の御行人の御行人の御行人の御行人

到東の曉よりて坐臥五七の自在なるは花散の
酒色ありあふかく能く能く遊と云はれり
和漢の逸遊と云ふも市中の大匠と云はれり
の八仙の詩よる酒中の大仙と云はれり

祭之田并万靈文 渡部狂

南無之界万靈無貴分無財分有縁摩無
縁摩從儒佛老莊之聖冥至詩歌連俳之
亡者送旅霖蓮葉一枚而不厭獅子庵之
侘者不重于抹香之臭分不生於宿魂之

語尔者謂詞之遊敵歷所詮者所謂滑稽言
之贊和縁五倫面通味也今夫謂懺悔之
大秘事乃者此度於文操之選場而註自
與評者之虛實也今歲用獅子窟之戸而
歌撰例之草稿月忽有二人之客而鶴髮
之叟謂身有仙居黃衣之男謂博整司歷
博整者實摩註者回而其面藤敷身有
何様評者顔而其容老矣率厥好思儒仙
之万卷則昇鉢羅崖之撰集尔摩上扉卸
鏡而阿難入於鑰穴而以如是我聞之

四字擴文殊普賢之智慧，顯觀音妙
 至之通力，其餘之天人麼，魔王麼，下在
 涅槃像之繪，其後無為，達人，身全于然，原
 儒行之沙汰，則遠，作刪詩，正樂，近至自標
 之論語，而以述而不作之四字，竊比於我
 老彭與者曰：竊兮曰：我兮，象，極給一代之
 虛實，則行人違者，認例之實字，而為指定
 高大夫，共，老與，數者，寓二人之面影，而謂
 謂神變權化之師，亦故儒家之七師麼，秋
 門之七佛麼，可知，有名無相之證據人也

花兮一言芳談之不事，欠無，則為寐兮為
 起兮，尽，佛優，而不包，又探一部之虛實，令
 懺悔字者，黜之，所以矣，懺悔，亦者，誘引，滅
 無量罪，與哉，相謂，佛語之馳走者，不冷，素
 麪兮，不飾，團子兮，煎茶者，入，選，名，花，輪，遠
 而茶漬者，面兮，之減，次才也，斯言則乘佛
 於之味，線，而為，似，口，而為，馳走，共，言，語，有
 謂，孔，門，之一，藝，居，謂，秋，氏，老，家，之，口，過，房
 花，咲，一，體，万，用，則，實，成，万，法，一，理，與，好，此
 故，佛，諧，者，令，贊，談，笑，有，諫，笑，言，有，道，了，也

詐去言語之遊者認虛認實人之假令抑
下我身而直人之尊履共言則為似瓦器
置銷而振舞針之和物果有者認一言
之實而不知万物之虛故也不實之實與
不虛之虛者再為之道一致之秘法厚哉
乾中俳諧師者常敵搜仙家之迂詐崩儒
行之真言譬則如為大名之仙人之不情
孔子兮不泥釈迦兮蒼花兮毀身兮知其
日其時之變則村檀那之穢孛而欺其事
此事欲是以論語尔麼謂君子可欺居倭


物而癩釈迦孔子之文而令穿鑿證人之
名判則為似折檀林咄之中而詰言葉之
散果以耳於聞万卷之表以心知一字之
裏了哉于時身有仙麼博登司麼笑々
合而不諱一部始終之骨折急度演茶漬
之一礼而博望者乘釈子之馬則為有者
乘芥子之牛而飛去西之太虚了矣享伴
丁未秋七月盃蘭盆日狂等噓之輪川之
流效源氏供養之摸樣而和兮漢兮連詩
兮誦歌兮斯有吊胸七之跡歷兮將所存

此世一人^モ麼慰^ル也^ニ奈文^ニ而朝^ス息之^ニ露^ノ路^ヲ稿^ヲ妻^ス
之^ノ歎^ヲ不^レ各^ニ狂^ニ言^ヲ綺^ノ語^ヲ與^ス也

○註曰一言^ニ芳^ク談^ス聖^ノ光^ノ上^ノ人^ノ詞^ニ述^ス世^ノ者^ノと^モあ^らま^りし^りま^りか^けら^る
古^ノ語^ヲ拾^リ遺^リノ取^リ意^ナリ^ト前^ニ出^タリ^ト△悲^シ華^ヲ經^テ慙^ニ愧^ニ憾^ニ悔^ニ滅^ス
魚^ノ量^ノ罪^ノ云^ク △花^ノ輪^ノ遠^ク △女^ノ未^レ以^テ印^ニテ^シ義^ノ濃^ニ莖^ノ長^ク
ノ各^ノ産^ナリ △論^ノ語^ニ言^ハ語^ニ掌^ニ我^ノ子^ノ貢^ノ四^ノ科^ノ中^ニ一^ニ藝^ニ
ナ^リ拊^スニ^ニ世^ニ一^ニ段^ニ花^ノ交^ノニ^ニ字^ニ用^リテ^シ万^ノ一^ノ轉^ニ回^ラ稱^ス
手^ナリ △史^ノ濟^ノ初^ノ首^ノ傳^ノ優^ニ子^ノ西^ノ秋^ノ以^テ談^ス笑^ヲ諷^ノ諫^ノ△優^ノ稱^ス
贊^ス善^ヲ為^ス笑^ヲ言^ハ然^レ合^ス大^ノ道^ニ云^ク △涅^ノ槃^ノ經^ニ佛^ノ法^ノ附^ス屬^ス
國王^ノ大臣^ノ有^リ九^ノ檀^ノ那^ノ△問^ニ答^ニ經^ニ預^ス知^ル 嫌^ス云^ク拊^スニ^ニ世^ニ

取^リ意^ナリ △論^ノ語^ニ君^ノ子^ノ可^レ欺^ラ不^レ可^レ圖^ラ△掌^ニ我^ノ子^ノ貢^ノ四^ノ科^ノ中^ニ一^ニ藝^ニ
ノ巧^クヲ責^ムナ^リ△遊^ノ敵^トハ^ニ双^ノ帝^ノノ詞^ヲ物^ヲ諱^ニテ^シ遊^ラハ^ニ云^ク
一^リ拊^スニ^ニ世^ニ一^ニ段^ニ花^ノ交^ノニ^ニ字^ニ用^リテ^シ万^ノ一^ノ轉^ニ回^ラ稱^ス
諫^スル^ニ事^ヲ方^ノ稍^ノ牧^ノ卑^ノ力^ノ面^ノ影^ヲ云^クル^ニヤ^ノ畢^ノ竟^ノ△削^ノ
面^ノ通^ス味^ナリ △大^ノ論^ニ仏^ノ經^ノ選^ノ場^ハ竹^ノ林^ノ精^ノ舍^ノ畢^ノ鉢^ノ
羅^ノ窟^ナリ阿^ノ難^モ四^ノ葉^ノノ余^ヲ承^テ鑰^ヲ際^ヨリ^ニ這^テ入^テ
仙^ノ如^ク説^ク法^セレ^ニ大^ノ衆^ニニ^ニ疑^アル^ニ如^シ是我^ノ聞^ノ發^ノ説^ノ語^ヲ直^ニ
ケ^リト^ク速^ク而^シ不^レ作^セノ辭^宜ヲ察^スシ △論^ノ語^ニ序^乃叙^者白^ク
傳^ニ礼^記刪^詩正^樂△論^ノ語^ニ述^而不^レ作^セ信^而好^ク古^ノ也^也
此^ニ於^テ我^ノを^レ鼓^ス△註^ニ克^ク鼓^ス高^ノ以^テ見^ル大^ノ戴^ノ礼^ニ拊^スニ^ニ
儒^ノ學^者有^リ八^ノ其^ノ書^ノ之^ノ更^ニ否^ラ乱^スヨ^リ其^ノ人^ノ有^リ無^クラ^レ免^トス^總

とて通用といひあうところも我々の所治ある
和漢と一牧の繪圖のよとく柳子庵の文庫より
写し置了爾雅の扁海のゆゑとあうところも
保呂波韻一冊よりとて中の増とあけむことせ

享保十二年 未秋九月如意珠目 

書目林

洛陽寺町押小路

橘屋治兵衛持行

